

竹下文字「黒ねこサンゴロウ」論

—伏せられた問題を巡って—

本田 幸 恵

序 目的と方法

竹下文字著「黒ねこサンゴロウ」シリーズは、一九九四年の七月から、一九九六年四月までに、全十巻が借成社から発行された、長編の児童文学である。『1 旅のはじまり』と『2 キララの海へ』では、一九九五年度「路傍の石幼少年文学賞」を受賞。同年には、「赤い鳥さし絵賞」も受賞している。対象年齢は小学校中級からである。

私が最初にこの物語を読んだのは、対象年齢と同じ、小学校中級頃だった。生まれて初めて夢中になった本が、この作品である。最新作が発行される度に、真っ先に図書館で借りて来て読んだ思い出がある。人間の男の子、ケンがある時、黒ねこサンゴロウと出会うところから、この物語は始まる。しかし、ケンの物語はすぐに幕を開

じ、一転、記憶喪失となったサンゴロウの冒険物語へと展開していく。

サンゴロウは、愛船マリン号と共に、うみねこ島近海で旅をする。その中で、時には命をかけて海賊と戦い、時に危険な薬草を巡って女猫シーナと対決するのだ。痛快なサンゴロウの一人旅は、やがて終幕を迎える。しかし、心待ちにしていた最終巻を読んだ時、「最終巻だけ、あまり面白くなかった」という感想を抱いた。それまで、胸を熱くさせる冒険物語を展開していたサンゴロウシリーズが、最終巻ではもっぱらサンゴロウの心理描写に終始していたためである。

記憶を取り戻すことへの恐怖を吐露するサンゴロウ、そして、突然現れた「もう一人のオレ」との対峙。私は正直、最初に読んだ時は、ただ怖い話だとは思わなかった。そして、なぜこういう展開になるのか分からず、

「好きじゃない」と本を投げ出していった。しかし、この時に感じた違和感のような、消化不良のようなものは、小さなしこりのような形で私の胸に刻まれた。

小学校を卒業した後も、大好きなこの作品を、私は図書館へ行って何度か読み返した。そして、読み返す度に、そのしこりは大きくなっていった。最初は単なる冒険譚だと思っていたが、読むごとに疑問点の多い作品へと変化していった。とりわけ、最終巻をくまなく読んでみると、それまでに読んできた何気ない描写が、伏線となつて浮かび上がってきたのである。それは何か、それを読む必要があるのではないかと気がかりになっていった。

この作品には何かが伏せられている。それは何か。しかし、「伏せられた」とは言つても、細部に気を配れば、読者にはそれらを読み取ることが出来る。それは、作者である竹下氏が、それらを解く鍵やサインを、作品の各所に盛り込んでいるからである。では、作者は、何を書こうとし、そのどこまでを読者に要求しているのだろうか。「黒ねこサンゴロウ」の中に、そつと伏せられたこれらの問題について、少し考察してみたいというのが、本稿の目的である。

第一 伏せられた物語

そつと伏せられた鍵、サインの大きなものは二つある。

一つは、サンゴロウの出身と、旅の意味についてであり、今一つは、サンゴロウの瞳の色とその意味についてである。そこから考える。

この作品の最大の謎は、サンゴロウの出身についてである。この作品には、うみねこ族とやまねこ族という二つの敵対する種族が登場する。サンゴロウは、うみねこ族として生きているが、彼は幼少時の記憶を失つていて、そのために、出身は曖昧である。出身に関する疑惑は、『1 旅のはじまり』から、すでに示唆されている。作者によつて、作品に残された最初の鍵、サインはこれである。

「うん。うみねこ族は、うまれた子どもに、かならず海に関係あるなまえをつけるんだ。おれのおやじは、フルヤ・カメキチ、おふくろは、サヨリといつた。あにきはナミマルに、タイジロウだ。おれのなまえは、サンゴとりをしていたご先祖にもらつたんだな。」（『1 旅のはじまり』一一〇頁）

種族を判別する手がかりは、名前に加え、もう一つある。それは瞳の色である。私は、作者の記しているサインの中の、大きなものをここに見る。うみねこ族の瞳の色については、「青い目」（『5 最後の手紙』一一五

頁) という記述がある。それに対して、やまねこ族の瞳の色は「コハクのような黄色っぽい目」(『3 やまねこの島』 四九頁) と書かれている。では、サンゴロウの瞳の色はどうか。サンゴロウの瞳の色について書かれている部分は次の通りである。

ちようどそのとき、特急は、トンネルにはいった。ごうごうという音の中で、サンゴロウの目が、ぴかっと、みどり色にひかつた。

(『1 旅のはじまり』二四頁)

きみどり色のほのおのようにひかる目が、ぼくを、じいっとにらみつけた。

(『1 旅のはじまり』九八頁)

サンゴロウの目は、金色だったり、みどり色だったりしたけど、いまは、ふかい海のようなふしぎな色にみえた。

(『1 旅のはじまり』一〇七頁) (傍線筆者以下同)

当初から「みどり色」「きみどり色」「金色」そして「海のような」色に見えているのである。今少し追う。

わたしが声をかけると、黒ねこはふりむいて、みどり色の目をひからせ、かるく片手をあげた。

(『3 やまねこの島』一三頁)

わたしは、はじめから、このふうがわりな、口数のすくない、するどいみどりの目をした黒ねこに興味をもった。

(『3 やまねこの島』三五頁)

サンゴロウの目が、みどりから、こいブルーに、ゆつくり色をかえていく。

(『3 やまねこの島』九八頁)

長老のコハク色の目と、サンゴロウの海のようなブルーの目が、まっすぐにぶつかった。

(『3 やまねこの島』九九頁)

みどりの目が、ばちばちとまたいた。

(『4 黒い海賊船』二三頁)

サンゴロウは、みどり色の目をすこしほそめて、わらった。

(『① ケンとミリ』一一五頁)

あたらしいペンキの文字をちらっとみて、親分が、

みどり色の目をほんのすこしほそめた。

② 青いジョーカー』四三頁)

ゆつくりと、親分がこたえるのがきこえた。その目が、ふかいふかいブルーにみえる。

② 青いジョーカー』九七頁)

ほとんどの場合、彼の目は「みどり色」「きみどり色」と表現されている。しかし、稀に「ふかい海のようなふしぎな色」、「こいブルー」、「海のようなブルー」、「ふかいふかいブルー」と表現されている。「青」に分類される色に表現される時は、彼が、何かに深く集中している時に多く見られる。彼の瞳の色は、普段は「みどり色」である。「みどり色」は、うみねこ族の瞳の色でも、やまねこ族のそれでもない。

ここで一つ注意するべきことがある。このシリーズの表紙に描かれている絵におけるサンゴロウの瞳の色である。着色されたそこに、こっそり一つのサインが伏せられているようにも思われる。では、実際に着色されている、表紙の絵ではどのように描かれているだろうか。

『1 旅のはじまり』：黄色（描かれているのは左目のみ）

『2 キララ海へ』：黄色（描かれているのは右目のみ）

『3 やまねこ島』：両目とも黄色

『4 黒い海賊船』：右・青と黄色、左・赤と黄色

『5 霧の灯台』：右・赤と黄色、左・青と黄色

① ケンとミリ』：右・黄色、左・薄い緑

② 青いジョーカー』：右・黄色と薄い緑、左・

黄色

③ ほのおをこえて』：右・黄色、左・水色

④ 金の波、銀の風』：右・黄色、左・水色

⑤ 最後の手紙』：右・黄色、左・水色

物語が終盤に近づくに連れ、瞳の色は右が黄色、左が水色（青）というように描き分けられている。特に、彼が自分の祖先について思いを巡らせることとなった、『③ ほのおをこえて』以来、瞳の色ははっきりと黄色と水色に描き分けられている。黄色はやまねこ族の瞳の色であり、水色はうみねこ族のそれである。表紙におけるサンゴロウは、両方の色を持っているのである。

もちろん、作家である竹下氏と挿絵作家である鈴木まもる氏は別人であり、絵に描かれていることが作者の意図であるとは言えないかもしれない。しかし、著者竹下氏のホームページ「閑猫堂」の二〇〇六年七月十三日の

(2)
日記には、挿絵作家鈴木氏との仕事の仕方について、次のような記述が見える。

「絵と文と、どっちが先ですか」ってよく聞かれます。

うちの場合は、ほとんど文（ネーム）が先です。

鈴木氏は、原作の文章を読んだ上で挿絵を描いているようだ。つまり、鈴木氏独断で描いたものではなく、作者竹下氏のチェックも入っているようにも思われる。いやむしろ、竹下氏の意向の上に描かれたものではなかったかとも思われる。すなわちこれは、サンゴロウの出身の問題に、瞳の色が大きく関連していると言うことを意図しているのかもしれない。そして、竹下氏が鈴木氏に何らかの意を含めて描いてもらったのかもしれないとも思われるのである。

そして今一つ、色に関わるサインが記されてもいた。瞳の色の謎の一つの答えは、次の一文に、隠されているようでもある。

おれは、青い玉をおいて、ねらった。むこうに、コハク色の玉がある。こんどは、まっすくに、つよくうった。青い玉が、水の上をすべるようにころが

っていつて、コハク色の玉にぶつかった。

コン！と、高い音がした。一瞬、時間がとまった。青い玉と、コハク色の玉のかさなつたところが、つめたいみどり色にみえ(⑤) 最後の手紙(十五頁)

これは、サンゴロウが「ガラス玉ゲーム」を行っている時の一場面である。青い玉と、コハク色とが重なる時、「みどり色」になると記してある。この玉突きだけのシーン、その後物語のどこにも関わらない。ただ一度だけ、物語的一幕として書かれているだけである。しかしそれ故に、ここに一つのサインが記されているようにも思われる。

すなわち、うみねこ族の青い瞳と、やまねこ族のコハクの瞳とを、重ねるとみどり色に見えるということである。この緑色の部分が、サンゴロウの瞳の色なのである。つまり、彼はうみねこ族とやまねこ族、二つの種族の血を半分ずつ受け継いだ、混血児なのではないか、と読むことが出来る。ふたつの血筋を受け継いでいることの象徴が、どちらの色でもあると言える「みどり色」の瞳なのである。

第二 サンゴロウの分裂

このように、サンゴロウの出身の謎は、わずかながら

読者にも示唆が与えられているのである。この問題がなぜそつと記されているのだろうか。それは、この作品の最大の要である「やみねこ」と「もうひとりのオレ」の存在に関わるようである。

うみねこ族じゃない？

おれは、顔をあげて、オレをみた。おれは、うみねこ族、じゃ、ない、のか？

「あなたが船をつくつてゐるあいだに、オレは、いろいろとしらべたんだよ。あなたの父親は、たしかに、うみねこ族の生き残りの子孫だ。でも、母親は、やまねこ族だ。あなたは、うみねこ族の青い目と、船乗りの血をうけついでいるが、ほんものうみねこ族じゃない。」

うそだ！おれは、さげんだ。そんなことは、うそだ。おれは……。（『⑤ 最後の手紙』一一五頁）

記憶を失ったサンゴロウは、最終巻の『⑤ 最後の手紙』で記憶を取り戻す。そこに登場するサンゴロウと瓜二つの容貌を持つ「もう一人のオレ」は、過去にサンゴロウと旅をしたこともある人物である。その旅の中で、サンゴロウは自分が自由に生きるために「もう一人のオレ」を見殺しにしていた。それはサンゴロウの原罪とも

言える。その「もう一人のオレ」が、最終巻で突如サンゴロウの前に姿を現す。「もう一人のオレ」と対峙したサンゴロウは、彼の言葉によつて、記憶を取り戻す。右はその一場面である。サンゴロウの瞳の色から推測できる混血説が、「もう一人のオレ」によつて、はつきりと突きつけられているのである。

「もう一人のオレ」が語ることのほとんどは、サンゴロウにとつては身に覚えがあり、自分の記憶として受け入れられるものだった。しかしその中で、サンゴロウが混血児だという、「もう一人のオレ」の言葉だけは、サンゴロウを打ちのめした。それは、サンゴロウが思い出したくなかつた記憶だったからである。サンゴロウは、幼い頃から、自分がうみねこ族だという証を求めて旅をしてきた。そして現在、うみねこ族として暮らしている。その彼にとつて、出身についての疑惑は最も目を背けたことだったはずである。サンゴロウは、自分の記憶（出身への疑惑）、家族、故郷、やまねこ族の血さえも、自分の自由のために捨てて、うみねこ族として生きることを選んだ過去がある。そんなサンゴロウを、「もう一人のオレ」は、自分勝手だと罵る。

「もう一人のオレ」は、サンゴロウの心の闇を明るみにする役割を持つている。では、彼は何者なのか。実は、彼は実在する人物ではない。その正体は「やみねこ」の

登場とも関わるようである。

「やみねこ」とは、『2 キララの海へ』でサンゴロウの前に登場した化け物である。サンゴロウの乗ったマリノ号は、激しい潮の渦に巻き込まれ、転覆しそうになる。その時に避難した洞窟で、サンゴロウは「やみねこ」に襲われる。しかし、「やみねこ」はサンゴロウに撃退され姿を消す。

しかし、「やみねこ」は、『⑤ 最後の手紙』で再び登場する。『⑤ 最後の手紙』の中で、サンゴロウの前に現れた「もう一人のオレ」は、突然「やみねこ」へと姿を変える。

オレのすがたが、水ににじむ絵の具のようにぼやけ、ゆらゆらと黒くひろがっていく。金色の目が、ぼつかりとあいたふたつの穴にかわる。

しゅうしゅうと息をはいて、ぶきみにのびちぢみしながら、そいつはわらった。

(やみねこ……おまえか！)

(『⑤ 最後の手紙』一一七頁)

「やみねこ」は、サンゴロウの心を欲しがり、彼を爪にかける。サンゴロウは茫然自失の状態で、死を受け入れようとする。しかし、正気を取り戻したサンゴロウが、

ナイフで「やみねこ」を突き刺すと、「やみねこ」は再び「もう一人のオレ」へと姿を変える。

「やみねこ！おれの勝ちだ！」

おもいきり、ナイフをつきたてた。(中略)

ぼわぼわと、黒いかげがよじれ、ちぢこまり、

ふたたびかたちをかえる。そこには、胸をおさえた

オレがよろめきながらたっていた。

(『⑤ 最後の手紙』一一二頁)

サンゴロウはこれまで、「誰かを見殺しにして生きのびた」ということを罪悪感から誰にも言えなかった。「もう一人のオレ」はその弱みにつけこみ、「やみねこ」という幻を創り、サンゴロウの忘れていた記憶と、彼の出身に関する最大の疑惑を突きつけることで、彼を動揺させた。では、「やみねこ」と、サンゴロウとはどのような関係にあるのか。注目したいのは、「やみねこ」が二度目に登場した時期が、サンゴロウは過去を取り戻すという意志が一番大きかった時期であるという点である。

「やみねこ」とは、記憶を取り戻さなくては、というサンゴロウの焦りと、彼の記憶に対する恐怖とが表れたものなのではないだろうか。「やみねこ」が生息する「北の海」は、サンゴロウが記憶を失った場所でもある。サ

ンゴロウは、自分が記憶を失った場所に出かけた時、無意識に失った記憶に対する思いが強くなっていたと考えられる。

サンゴロウは、失った過去に対して感情が高まると同時に、記憶を取り戻せないもどかしさに苦しんだ。そして、「早く記憶を取り戻さなければ」という焦燥が、「やみねこ」という幻として彼の前に現れたのである。記憶を取り戻したい、と強く思うことで生まれた幻は、サンゴロウに、記憶を取り戻させる行動をする。

「やみねこ」が最初に登場した時は、サンゴロウを人間界へと漂流させた。この時サンゴロウが辿り着いた場所は、生まれ育った人間界である。サンゴロウは記憶こそ取り戻さなかったものの、人間界に懐かしさを感じるなど、記憶を取り戻すきっかけが与えられている。

そして、「やみねこ」が二度目にサンゴロウの前に姿を現した時、「もう一人のオレ」を登場させ、サンゴロウに記憶を突きつけた。しかし逆にサンゴロウが最も「記憶を取り戻す」という意志が高まった時、その意志が、「やみねこ」として現れているのではないだろうか。

また、「やみねこ」は、サンゴロウの罪を知り、厳罰を与える存在としても、登場している。「やみねこ」は、サンゴロウに辛い思い出や不安を突きつけ、サンゴロウを弱らせて、食べようとする。サンゴロウの心の底に、

「罪には罰が与えられるべきだ」という気持ちがあり、それが「やみねこ」に投影されているのではないか。「やみねこ」は、サンゴロウが過去を取り戻したいと思う気持ちや、焦り、恐れ、それらの全てが反映した存在なのだ。

これまでに記してきた論では、「やみねこ」が主体となっている。しかし、「もう一人のオレ」が、「やみねこ」を創り出したという可能性もあると考えられる。「もう一人のオレ」の方がサンゴロウの意識であり、それが増大した時、無意識が「やみねこ」を創り出したとも考えられるのである。

第三 無意識の意識

それでは、サンゴロウの無意識の意識とは何か。それは、人間界にいた頃に、彼が抱えていた、うみねこ族に対する憧れの裏にあった、不安と憎しみである。昔、うみねこ族とやまねこ族は争い、うみねこ族の大部分は海の世界へ去っていった。サンゴロウの先祖は陸（人間界）に取り残され、ひっそりと生きてきたのである。サンゴロウは、うみねこ族に憧れながらも、彼らの自由な生き方に憎しみも抱いていた。なぜならば、彼らは新たな土地で自由な生活を送っているが、サンゴロウ達、人間界に残されたうみねこ族は、やまねこ族から身を隠す生活

を余儀なくされていたからである。特に船乗りには憧れていたサンゴロウは、自分の理想の生き方とは違う生き方を強いられると感じていたはずである。そんな、無意識の憎悪は、出身への猜疑心や、家族への罪悪感と共に大きくなっていった。そんな、自分を置き去りにしていったうみねこ族の先祖への憎悪は、彼がうみねこ族に憧れを募らせると同時に大きくなっていった。

うみねこ族に憧れるサンゴロウは表の姿である。うみねこ族に憧憬を抱くあまり、純粹なうみねこ族ではないかもしれない自分の血統への葛藤に苦しむサンゴロウが、「もう一人のオレ」を生み出した。故に、「もう一人のオレ」は、そんな彼の弱点を糾弾してきたのである。そして、無意識のうちうみねこ族を妬み、憎む、そのサンゴロウの心が、「やみねこ」をも生み出したのである。

「やみねこ」は、サンゴロウの心を欲しがり、取り込もうとする。それは、理想の生き方を手に入れたサンゴロウに対して、「もう一人のオレ」(過去のサンゴロウ)が感じている気持ちなのである。サンゴロウはいつの間にか、自分が憎んでいたうみねこ族と同じ生き方をしていった。サンゴロウは、昔の自分を捨て、新たな人生を歩みだしたが、そのことに対して、消えない罪悪感があった。それは、昔憎んでいたうみねこ族と同じことを、自

分が家族に対して行っているからである。うみねこ族を憎んでいた気持ちは、「もう一人のオレ」にあり、それがうみねこ族として生き始めた自分への憎悪に変わる。それが「やみねこ」となって彼に襲いかかったのである。以上のように、「もう一人のオレ」と「やみねこ」はお互いに関連した存在である。

「もう一人のオレ」「やみねこ」が登場することで、サンゴロウの罪は明らかになる。自分自身を捨ててまで、自由を手にした過去が、サンゴロウの罪である。しかし、彼の罪とはそれだけなのだろうか。その根底には、それらと関わりながらより深い罪の意識があるようである。

「オレは、あんたがきらいなんだよ。がまんがならないんだ。あんたのつよさと、自信と、こわいもの知らずの度胸がさ。いつも冷静でおちついていられるところがさ。あんたの、自分勝手な生き方がさ。」
 (『⑤ 最後の手紙』一〇〇頁)

「オレはな、あんたがゆるせない。じぶんのおもうつおりに生きるって、あんたはいつもいうよな。わがままでおもわないか? あんたの親やきょうだいが、北の陸地にのこり、山おくだひどいくらしをしているのを、あんたは、関係ないっていうのか?

母親は、気がよわくて、病気がちだったよ。きょうだいの中でも、変わり者のあんたのことを、いちばん心配してた。それをわすれて、じぶんだけ、すきなようにのんびりくらして、それで自由かよ？」

〔⑤〕 最後の手紙 一一三頁)

あんたは、よわくて、いくじなしの、ただのねこだ。

〔⑤〕 最後の手紙 一一四頁)

これは、「もう一人のオレ」がサンゴロウに対して言い放った言葉である。「自分勝手な生き方」や「じぶんだけ、すきなようにのんびりくらして」とあるように、サンゴロウが求めてきた自由は、本当に自由なのか、という疑問が投げかけられている。そして、次の場面は、どれもサンゴロウが「もう一人のオレ」に会う以前のものである。

いま、ここで、おれはひとりんでいるんだな、とおもった。そんなことを、これほどはつきり感じたのは、はじめてだった。何度か、おれは、そのまま船のむきをかえ、うみねこ島にもどりたくなかった。

〔⑤〕 霧の灯台 一一三頁)

うみねこ島は、いまは、花の季節だ。

西海岸の日のあたる斜面も、白いみかんの花がさかりだった。みかんの花がこんなにさいているのを見るのは、はじめてのような気がした。それとも、いままで何度もみていたのに、気がつかなかったのかな。

おれは、島にいたりいなかっただりする。船にのっていることのほうが多い。知らないうちに、花はさいて、ちつてしまう。そして、海の上にはどんな花も咲かない。

〔⑤〕 最後の手紙 四二頁)

「親分の家は、なんだか、家っていう感じがぜんぜんしんないですね。」

いつか、たずねてきたイカマルが、部屋の中をみまわして、そういった。

「ぼろ屋さ。」

「いやあ、ほとんど船みたいですよ。このまま海にうかべれば、船ですよ。」

そういえばそうだ。まともな家らしい家なんて、おれは、もつことがないかもしれないな。(中略)

船にも、家にも、おれはよけいなものをおかない。とくに船には、ぎりぎり必要なものしかのせられない。なにがだいじで、なにがそうじゃないか、とつ

さに判断するくせがついてる。ときには、ほんとうに必要なものだって、ほうりださなきゃならないこともあるんだ。

【⑤ 最後の手紙】五六頁）

目をつぶると、ぼんやりと、かれたススキの野原みたいなけしきがうかぶ。

野原には、だれもない。風がふいてる。ススキの穂が、ざわざわ波みたいにゆれる。いや、野原じやなくて、海なのかもしれない。どこまでもつづく、銀色の海。

それだけだ。

あんまりしあわせな子ども時代じゃなかったのかな。（中略）

こんな夜、ねむらずに船をはしらせると、あの銀色の野原をはしってるような気がしてくる。どこまでもつづく海だ。だれもない。風がふいてる。

おれは、いつたい、どこへいきたいんだろう。

【⑤ 最後の手紙】七〇〜七二頁）

これらの場面からは、サンゴロウが自分の生き方に対して懐疑的になっている様子が伺える。彼は、自分だけを信じて、一人で海に出て暮らしている。また、それを求めて生きてきた、しかしその結果、島にどのような花

が咲くのかも知らず、自分の家にも居場所を見つけられず、自分を慕い、助けてくれる人達とも密な関係を築くことが出来ていない。サンゴロウはただ一人で生きてるのである。

サンゴロウの真の原罪とは、ここにある。サンゴロウは、自由という殻に閉じこもり、現実を見ようとしていなかったのではないだろうか。サンゴロウの現実とは、【⑤ 最後の手紙】（七〇〜七二頁）の引用文に現れている。彼は、あまり幸せではなかった子供時代となんら変わっていない。海に憧れ、船乗りを夢みて、渴望していた子供時代。しかし、それを得た今も彼の生き方は、変わっていないのである。

彼は、「自由」を求めて故郷や家族、自分の記憶まで捨ててうみねこ島に來た。それにも関わらず、自分が進みたい道も分からず、一人ぼっちで生きている。これが、彼の望んでいた生き方なのだろうか。サンゴロウは、理想とする「自由」から、少しずれた生き方に、もどかしさを感じつつも、それから目を背けて、生きているのである。

サンゴロウは、他者との関わりを重要視することなく「一人」にこだわって生きている。しかし、サンゴロウは、本当は「一人」になるのは、怖くて仕方がないのである。

オレが、つめたくわらった。

「こんどはオレのばんだ。あんたを、みすててやる。この海に、永久に放り出してやる。あんたは、よわくて、いくじなしの、ただのねこだ。」
いやだ、とおれはいった。いやだ。ひとりぼっちで海をただようことをかかんがえると、死ぬほどおそろしかった。

「そうだ。海がこわいだらう。ひとりでいるのは、こわいだらう。オレもこわかったんだぜ。」

『⑤ 最後の手紙』一一四頁)

サンゴロウは「一人」がいいと言いつつも、「もう一人のオレ」によって、本当に一人ぼっちにされそうになった時は、怖くて震えるのである。本当は一人になるのが怖くて仕方がない、しかしそれなのに、「一人」や「自由」にこだわって、自分の心を閉じてしまっているのである。

また、サンゴロウは過去に、やまねこ族の血を犠牲にしようみねこ族として生きることを選択している、しかしうみねこ島を自分の居場所として認めることも出来ていない。マリン号に閉じこもり、そこを唯一の居場所としてしまっているのである。それは、人間界に不満を持

ち、自分の居場所を探していた、子供時代となんら変らない生き方である。

「自由」になるために家族や血筋を犠牲にしたが、サンゴロウはそれに見合った生き方を手に入れたのだろうか。彼は、手に入れた「自由」という、自分の生き方に迷いながら生きている。自分にとっての本当の自由とは何かを、追求しないまま、お仕着せの「自由」を生きているのだ。それが、即ちサンゴロウの原罪なのである。

第四 サンゴロウの旅立ち

では、サンゴロウは自分の罪を乗り越えることが出来たのだろうか。サンゴロウにとつての償いとは、自分の居場所を定め、旅を終わらせることである。

ナギヒコに当てた手紙の中で、サンゴロウは「うみねこ島に帰る」と言っている。この手紙の中で、サンゴロウはうみねこ島を自分の居場所とする意志を固めている。しかし、その直後に「やみねこ」と対決した時には、「自分の生まれたところへ帰る。ずっとそうしたいと思っていたはずだ」と、再び人間界に戻る意思を示しており、自分の落ち着くべき場所を定められないでいる。この瞬間、サンゴロウは再び「やみねこ」に心を触まれそうになっている。

だが、最終的に彼は「うみねこ族」として生きる気力

を取り戻す。

これなら、日がしずむまえに港につく。(いそしぎ亭)の窓ぎわの席から、おれのすきな金色の夕やけがみられるかもしれない。

港? そうだよ。おれのかえる港は、ひとつしかないんだ。 (『⑤ 最後の手紙』一二五頁)

「もう一人のオレ」を倒した瞬間、サンゴロウは自分の故郷と、「自分の生まれたところへ帰りたい」という思いを同時に捨てたのではないだろうか。そして、うみねこ島で、うみねこ族として生きていく決心がついたのである。では、サンゴロウに、うみねこ島が自分の居場所なのだ決心させたものは何か。

(サンゴロウ!)

きこえない声がよんだ。

(いかないで。いっちゃだめ。)

ミリ……ミサキ?

力をふりしぼって、おれは、手をのびした。

その手に、子どもの小さな手がさわった。ぬれてひえきった手が、ふるえながら、しがみついていた。

そうだ。おれは、生きのびなきやならない。ここ

にとどまって、どうしても、生きのびなきやならない。おれには、まだここでやることがある。

(『⑤ 最後の手紙』一二〇頁)

「やみねこ」に取り込まれそうになった場面でのサンゴロウの思いである。彼が世話になっっているカジキ船長の孫であるミサキが、彼を現実と呼び戻している。ミサキは、サンゴロウに船の操り方を習いたいと申し出ていた。

サンゴロウを正気に戻したものは、彼がこれまで省みることが無かった、四年間で作られてきた人間関係だったのである。自分を頼っている存在、そして、自分が頼りにしている存在が、周りにはたくさんいることを、サンゴロウ自身が気がついたのである。

サンゴロウはこれまで、記憶を取り戻して、自分の生まれた場所に帰ることも、失くした記憶を捨てて、新しい人生に落ち着く決心も出来ていなかった。それ故に、誰にも頼らない、一人ぼっちの旅人だったのである。しかし、「やみねこ」に取り込まれそうになった時、守らなければいけない存在を身近に感じ、同時に生きる目的も取り戻した。彼の「やること」とは、今の現実に生きて、後継者を育てるということである。彼は、うみねこ族として、船の操り方を伝承していく一人になる決意を

固めたのではないだろうか。うみねこ島を自分の居場所とすることが、「もう一人のオレ」を乗り越えることになったのである。

サンゴロウの旅の目的は、失くした記憶を探すことだったが、最後には生きる目的へと変化している。それは、これまでのサンゴロウの生き方とは全く正反対の生き方の選択と言えるのではないだろうか。サンゴロウのこれまでの生き方は、利他的であった。

「どんなときでも、だれのためでもいいけどね、とにかく、生きてるってことがだいじなんじゃないかな。」

おまえは、そういったな。

「だって、死んだら、もうなにもできないよ。他人のために、なにかしたかったら、まず、じぶんがちゃんと生きのびるべきだよ。」

おまえが医者で、おれが船乗りだからかもしれない。病気をなおし、人をたすけるのが、おまえの仕事だ。医者が生きのびなければ、患者はたすからない。とうぜんだ。

おれのは、そうじゃない。ガラス玉ゲームだ。台の上を、くるくるまわって、ぶつかる。それだけだ。運がよければ勝つ。運がわるければ、もちろん、負

ける。

『⑤ 最後の手紙』九六頁)

これまでのサンゴロウは、運任せで、生死に頼まない生き方をしてきた。それは、「なんのために生きるのか」という生きる目的が無かったからだと言える。最後の場面でも、「やみねこ」に飲み込まれそうになったサンゴロウは、ひとまず、「長い旅のおわり。」と、あつさりとして受け入れている。それは、これまでの、生に執着しないサンゴロウの生き方からすれば、当然の選択と言える。

しかし、ミサキの言葉で我に返り、生きることを選択しようとしたのである。サンゴロウは、いわば自由な自分、自己中心的な生き方を肯定するために旅を続けてきた。しかし、そんな彼が、そういった自分の生き方を否定した瞬間といえるのではないだろうか。サンゴロウは、初めて、自分のためではなく、他人のために生きることを選択しようとしたのである。ここに、「もう一人のオレ」を乗り越え、成長したサンゴロウの姿が見える。

「オレは、あんたなんだよ。これでただしと、あんたはおもうのかい。」

「そうだよ。これでいい。」
おれは、いった。

「おわかれだ。」

金色の光がうすれた。オレのからだだが、ぐらっとまえのめりになった。そのすがたが、ふっと消えた。

〔⑤ 最後の手紙〕一二三頁)

サンゴロウは、自分自身である「もう一人のオレ」を捨てた。自分がやまねこ族かもしれない、という疑惑や家族に対する罪悪感を捨て、うみねこ族として生きていくことを選択したのである。

しかし、「もう一人のオレ」を、一度ならず二度までも置き去りにすることを選択したサンゴロウは、本当に過去を乗り越えたと言えるのだろうか。そこでも不完全なまま生き続けることになるのではないか。「もう一人のオレ」とは、彼の弱い部分である。サンゴロウは、記憶を取り戻すと同時に、自分の中の弱い部分、そして、自分の出身に関する真実を知った。それらの記憶は、人間界にいた頃のサンゴロウにとつては、抱えきれないものだった。

しかし、サンゴロウは四年間うみねこ族として生き、自分がうみねこ族であるという確証がなくても、うみねこ島で生きていく土台が作れていた。それは、自分の弱い部分を受け入れる準備が整ったと言うことではないだろうか。そしてそれ故に、記憶を自然に思い出したのである。

ある。サンゴロウにとつては、記憶を取り戻すこと自体がすでに償いだったのだ。彼は、自分の弱い部分を認め、それを抱えながら生きていくことを決心したのである。

結 作者の意図

この作品には、作者の大きな意図が隠されている。そして、それらの謎を解く小さな鍵、サインは。要所に組み込まれていたのである。サンゴロウの出身に関する謎は、『⑤ 最後の手紙』の「ガラス玉ゲーム」の場面で、ガラス玉の色によって、読者にも投げかけられていた。

作者はサンゴロウの罪に関しての気づきをあまり期待していなかったかもしれない。なぜならば、作者が書きたかったのは、ひとまずはあくまで冒険物語であり、児童文学だったからである。

だが、「黒ねこサンゴロウ」シリーズには、娯楽性の裏に、確かに闇の部分がある。その闇の部分は、読者に手が届く範囲に、そっと伏せられていた。幼い読者にはただ不思議な場面として残るかもしれない。しかし、彼らが大人になって読み返したときには、確かな疑問点として残るような程度の鍵、サインは残されているのである。そしてまた、これらの伏せられた問題は、同シリーズを何度も読み返させるきっかけになり、作品に深みを与える要因にもなっている。

かくて、「黒ねこサンゴロウ」は優れたエンターテインメント的な児童文学であると同時に、読者の心に訴えかける一つの大きな問題提起をした作品としての要素を持つということを書いておきたい。この物語は、「一人だけでは生きていけない」というテーマを持っているように感じるのである。サンゴロウは、人間の男の子ケンと共に旅をし、「もう一人のオレ」と共に人間界を飛び出した。そして、誰かに頼ろうとする弱い自分を切り捨てて、ひたすらに強い自分を求めて一人旅をしてきた。

しかし、そんなサンゴロウは、「もう一人のオレ」という自分自身によって、否定される。サンゴロウは家族を捨て、自分の中の邪魔なものをも捨てて、自分の生きたいように生きてきた、という罪に気がつく。読者にとっては、それまで正義であると信じてきた主人公が、悪に変わる瞬間でもあったのである。それまでのサンゴロウは、いつ死んでもかまわない、という利那的な生き方をしてきた。運任せで、生死に頓着ない生き方をしてきたのである。しかしそれは、「なんのために生きるのか」という生きる目的が無かったからだとも言える。最終巻でも、「やみねこ」に取り込まれそうになったサンゴロウは、「長い旅のおわり」として、あっさり死を受け入れようとしている。それは、これまでの、生に執着しないサンゴロウの生き方からすれば、当然の選択と言え

る。

しかし、サンゴロウは、ミサキの言葉で我にかえり、生きることを選択した。それまで、自分の生き方を肯定するために旅を続けてきていた。利那的で、他者と関わりを持たないために、生への頓着や未練がない生き方である。しかし、サンゴロウはミサキを通して生きることの意味を考える。それは、サンゴロウが、初めて自分の生き方を否定した瞬間と言えるのではないだろうか。

一旦は自己中心的に生きようとした主人公が、その自分を否定することで、人と共に生きる生き方に転じる。サンゴロウが否定した自分の生き方とは、他人との関わりを断ち、自分一人だけで生きていると奢っていたことである。サンゴロウの旅の終着とは、記憶を取り戻すことではない。過去に犯した自分の過ちに気がつき、それを抱えながら新しい生き方をしていくことを決意したことなのである。

「黒ねこサンゴロウ」シリーズには、そういった物語が伏せられていたのではないだろうか。

〔注〕

(1) 使用テキスト。(『黒ねこサンゴロウ』シリーズは1〜5、『黒ねこサンゴロウ旅のつづき』は1〜5に分かれている。本稿では、区別のため、後者を

①く⑤と表記した)

- 『黒ねこサンゴロウ1 旅のはじまり』
一九九四、七 偕成社
- 『黒ねこサンゴロウ2 キララの海へ』
一九九四、七 偕成社
- 『黒ねこサンゴロウ3 やまねこの島』
一九九四、十 偕成社
- 『黒ねこサンゴロウ4 黒い海賊船』
一九九四、十 偕成社
- 『黒ねこサンゴロウ5 霧の灯台』
一九九四、十二 偕成社
- 『黒ねこサンゴロウ旅のつづき① ケンとミリ』
一九九六、三 偕成社
- 『黒ねこサンゴロウ旅のつづき② 青いジョーカー』
一九九六、三 偕成社
- 『黒ねこサンゴロウ旅のつづき③ ほのおをこえて』
一九九六、四 偕成社
- 『黒ねこサンゴロウ旅のつづき④ 金の波 銀の風』
一九九六、四 偕成社
- 『黒ねこサンゴロウ旅のつづき⑤ 最後の手紙』
一九九六、四 偕成社
- (2) ホームページ

「閑猫堂」 <http://blog.goo.ne.jp/chewette>

— ほんだ・さちえ 2008年度日本文学科卒業生 —